Hearn: the Last Hunter

and other stories

[編]ブラッドレー・ボンド
Bradley Bond
[訳]本兒有＋杉ライカ
Honda Yu+Sugi Leika

ハーン・ザ・ラストハンター

アメリカン・オタク小説集

あなたのニューロンを直撃する
試し読み小冊子

★収録短篇の中から、「ようこそ、ウィルヘルム！」を一部掲載

筑摩書房

「ニンジャスレイヤー」シリーズ著者ブラッドレー・ボンドによる序文

長きにわたりニンジャ小説を執筆している中で、私はしばしば「そのイマジネーションの源泉はどこにあるのか？」といった質問を受けます。言わずもがな、それは日本の様々なカルチャーやエンタテイメント作品……映画、小説、漫画、ゲーム、音楽など……とにかく日本の全てです。サムライ、ニンジャ、ヤクザ、ゲイシャ、カラテ、スシ、ゼン……それらは何歳になっても、また世界情勢がどれほど変わっても、私の心をワクワクさせ続けてくれるのです（おそらくあなたがガンマンや、吸血鬼や、スパイや、魔法使いや、スーパーヒーローや、タコ頭の邪神などに心ときめかせるように）。

しかし、それだけではありません。私は日本をテーマ（あるいは舞台）として扱うアメリカの作品群にも、強く魅了されてきました。一例を挙げてみましょう。映画ならば『ブラック・レイン』や『キル・ビル』や『ラスト・サムライ』や『ニンジャ・サンダーボルト』、小説ならば『ニューロマンサー』や『シブミ』や『ザ・ニンジャ』など。最近のタイトルだと『GODZILLA』や『ベイマックス』も大いに楽しみました。このように私は「日本産の日本作

品」と「アメリカ産の日本作品」の双方を愛好しているのです。

さて、これまでに私が挙げたのは、どれもプロの手で作られた有名な作品群ですが、実は私の家の書斎には、多くのアマチュア作家の手で書かれた日本テーマの同人小説群もコレクションされています。彼らも私と同じように、ここで挙げたような双方の作品群から強い影響を受けて、日本テーマの作品を書いているのです。

今回はその中から、ぜひ日本の読者の皆さんにも読んでいただきたい、とても面白くてパワフルな作品を、いくつかピックアップしてみました（翻訳や各作者とのコンタクトについては、私にとって旧知の仲である日本の翻訳チームに任せました）。情け容赦ないヨーカイ狩りのダークファンタジー、日本の篠山県（しのやまけん）を舞台としたサバイバルホラー、宇宙のトーフ工場を舞台としたSF、MMORPGもの、少年漫画スポーツもの、そしてカワイイな女子高生が操縦する巨大ロボットものまで……なるべくたくさんのテーマやジャンルを網羅（もうら）できるように、バラエティ豊かな短編作品群を選んだつもりです。個々の作品の面白さについては、私が保証します。まずは読んでいただくのが話が早いでしょう。各作品と作者の背景については、翻訳チームによって付された「解説」が理解を助けてくれると思います。では、どうぞお楽しみください！

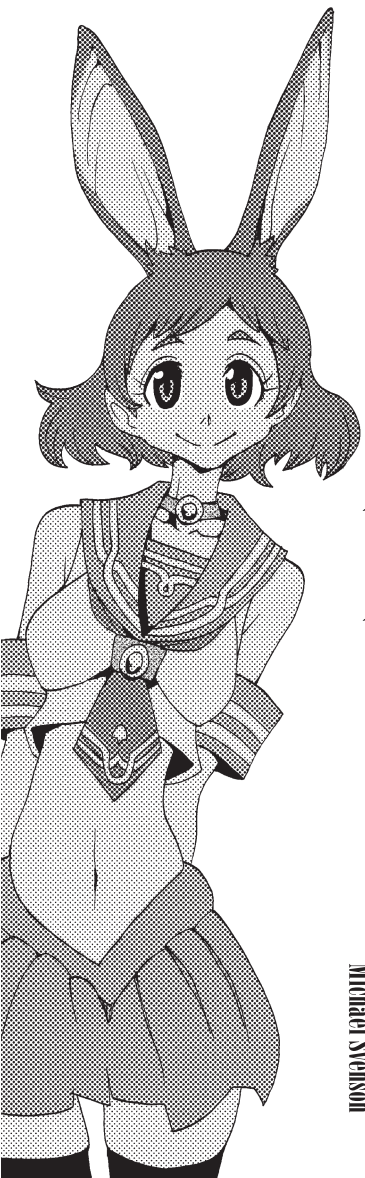
ブラッドレー・ボンド

二〇一六年七月　ニューヨークにて

Welcome, Wilhelm!

ようこそ、ウィルヘルム！

マイケル・スヴェンソン
Michael Svenson



収録短篇の中から、奇跡と感動のカルチャーギャップMMO「ようこそ、ウィルヘルム！」を一部掲載します

MMO…大規模多人数同時参加型オンラインゲーム

イラスト／久正人

1

竜の辻の魔女狩師（ウィッチハンター）、ウィルヘルムの脳裏に焼き付いていたのは、故郷の西、赤い砂嵐が吹きすさぶデッドランドの荒野に突然現れた、あの虹色の竜巻のこと。いつものように、境界線を超えて死の森からやってくる忌（い）まわしいネクロ・ファクションの略奪部隊を追っていたウィルヘルムは、運悪く、愛馬ロードキルごとその竜巻に呑まれてしまったのだ。

「うう……」

頬（ほお）を叩く雨粒に気付き、ウィルヘルムは飛び起きた。彼は反射的に水筒の蓋（ふた）を捻（ひね）り、そこに雨水を貯めようとして、手を止めた。その手には濡れた泥がまとわりついていた。ここは砂漠ではない。濡れた土。岩がちな斜面。まばらに生える美しい針葉樹。視界を覆う幻想的な霧。……見覚えのない山岳地帯だ。かなり標高が高いとみえる。全く別の世界に来たかのようだ。

「どうなってやがる……」

体のあちこちが痛んだが、厳格な魔女狩師の気概とタフさをもって、ウィルヘルムは立ち上がった。すぐ近くにはせせらぎがあり、澄んだ水が流れていた。血の川でも、毒の川でも、溶岩の川でもない。デッドランドでは極めて貴重な、正真正銘の真水だ。透き通ったまっさらな水面には、ウィルヘルムの傷だらけの厳（いかめ）しい顔が映っていた。

ウィルヘルムは笑いながら駆け寄り、水筒でそれをすくって、ごくごくと喉を鳴らしながら飲んだ。ここで水はおそらく、いかほどの価値も持たぬのだろう。それはウィルヘルムにとっ

て喜ばしい事だった。水筒の中身の残りを気にしなくて良い世界は、大歓迎だ。
間もなくして、彼は自分の軽はずみな言葉を後悔した。気が滅入るほどの土砂降りの雨に襲われたからだ。
ウィルヘルムは悪態をつきながらあたりを散策し、ロードキルの名を呼んだ。不幸中の幸いにして、愛馬は近くの林の中で気を失って倒れていた。ブルルルル、と威勢の良い鼻音を鳴らして立ち上がり、愛馬は主人のもとに駆け寄った。外傷もなく、ロードキルはすぐに彼を乗せて歩き出した。
雨はなお強まり、腹も減り始めた。小動物を探して狩りを試みたが、どうにもうまくいかない。理由は土地勘のなさだけだろうか。とてもそうとは思えない。ウィルヘルムのボウガンの腕前は、少しも鈍ってなどいなかった。単純に、ここには動物がほとんど生息していなかったのだ。
速やかに下山し、街を探さねば、野垂れ死にするだろう。
「不運という名の猟犬が、俺たちの足首にかじりついてやがるな」ウィルヘルムはロードキルの背に揺られながら、十三層地獄の悪魔たちに対して不遜な悪態をついた。「くそったれのアークデーモンどもめ！　もっとマシな世界を作りやがれ！」
数時間後。ウィルヘルムはたった独りで、当て所もなく山を彷徨っていた。
ロードキルはもういなかった。豪雨の中、がれ場を進んでいた時に、中型のワイヴァーンか

ら不意打ちを受け、愛馬ロードキルは致死毒におかされた。ワイヴァーンはボウガンで頭を撃ち抜かれ、猛毒の血を流して死んだが、その毒は強く、返り血を浴びたウィルヘルムですらも酷い熱に襲われたほどだ。

ワイヴァーンの尾の針で毒液を体内に注ぎ込まれたロードキルの運命は、あえて説明するまでもあるまい。ロードキルは岩場に倒れ、痙攣しながら、苦しげに息をしていた。空には黒雲がわだかまり、雷が鳴っていた。助かる見込みは無かった。

「あばよ、ロードキル。強欲な暗黒の神々にも、デザート・グールの信徒にも見つかるな。お前の魂は、奴らの骨の腕より早く、ヴァルハラに昇れ」

ウィルヘルムは優しく語りかけながらロードキルを撫で、その目を閉じてやった。そして縞瑪瑙の装飾が施されたナイフを抜き、それを素早く閃かせた。

愛馬を毒の苦しみから一瞬で解放するため。そしてロードキルの肉で飢えをしのぐために。ウィルヘルムの涙を押し流すように、雷と豪雨がなお激しさを増してゆく中、彼はナイフを振るって愛馬の死体を解体していった。

……だが、何かがおかしかった。

全てが滞りなく終わった時、ウィルヘルムは異変に気付いた。本来ならば、このサイズの馬を殺せば生肉が最低でも三個、腸と臓物が一個、さらにレザーの素材となるラフハイドが二個は手に入るはずだった。運が良ければ、魔女どもがウィッチクラフトの材料に使う見事な頭骨も一個、レアドロップするはずだった（それはかなりの金額が期待でき、新たな馬と馬具一式

を買うのに十分なほどだ)。
だがロードキルの死体からドロップしたのは、「イグゼシオ」と刻印された奇妙なコイン一枚だけであった。しかもロードキルの亡骸と血の跡は、次第に色を失って真っ黒に変わり、バチバチと雷撃を放ちながら消えてしまったのだ。まるで天上の神々が、お前はこの世界に存在してはならぬとでも言っているかのように。
「……どうなっちまったんだ」

空腹と戦いながら、ウィルヘルムは南に向かって丘を下っていった。夜、山の上からそちらの方向に文明の灯りを見つけたからだ。彼の手には食べかけのリンゴが握られていた。道中でリンゴのなる樹を見つけなければ、ウィルヘルムはここに来るまでに行倒れていたことだろう。
やがて寂れた街道らしきものを見つけ、それを辿っていった。霧の向こうに、巨大な街の影が見え始めた。近づくにつれ、街道は次第に石畳へと変わった。
「でかいな……城塞都市か……?」
雨はもう止んでいた。霧が晴れ、街道の先にある都市の全貌が露わになった。白く美しい防壁や尖塔群は仰ぎ見るほど高く、洗練された曲線美を誇っていた。
なんと巨大で壮麗な都市であろう。ウィルヘルムは目を見開いた。果たしてここには、どのような種族が暮らしているというのか。彼はすぐにその答えを知る事となった。
やがて街道は四つ辻で交わり、四人組の美しい女エルフの冒険者たちが、快活にジャンプし

ながら西へと向かって行くのが見えた。

（#@X%！　エルフの @#&%? どもか……！）

神々も目も伏せるほどの罵倒の言葉を呟きながら、ウィルヘルムは反射的に、四つ辻の樹の陰に隠れ、ボウガンを構えた。魔女狩師は、人間以外の種族を決して信用しない。エルフは人間の完全な敵とは言えないが、決して心を許せる相手ではない。かつての栄光を失って久しいといえど、連中は元自分たちの奴隷であった人間族を劣等種族と見なしており、その薄笑いの奥には根強い差別意識が隠されているからだ。

異種族に心を許してはならない。物品の売買を持ちかけられても、エルフに対しては五割増しの値段を吹っかけるのが竜の辻の慣習である。

（しみったれのエルフどもに、これほど大規模な都市が維持できるとは思えん。他の種族は居ないのか……？　人間は……？）

街道沿いの木々に隠れながら、防壁の門へと忍び歩きで近づくにつれ、他にも大勢の冒険者たちが快活にジャンプしながら街道を行き交っているのが見えた。エルフ、人間、ドワーフ、誰も彼もが美男美女。輝かしい鎧をまとい、巨大な武器を持っていた。

（何だこれは……！）

中には、青や赤の肌を持つ奇妙な種族や、半人半獣のごとき謎めいた種族もいたが、当然これらもみな、彫像の如く顔立ちの整った美男美女ばかりであった。特に人間族の男たちはほぼ皆、色とりどりの髪を鋭角な束状に固めており、耳が尖（とが）っていない以外はエルフと大差無い、

煌めくような容姿の美しさであった。そして誰も彼もが爽やかな笑顔を浮かべており、彼らが皆、デッドランドでは想像もつかぬほどの平和と調和の中にいるのが見て取れた。

ウィルヘルムは雷撃のようなショックに打たれ、よろめいた。そして、ある伝説が脳裏をよぎった。

「これほどの種族がいるのに、何故いさかいが起こらない……？　もしや、ここは……」彼はボウガンを収め、ゴクリと唾を飲んで額の汗をぬぐった。その時であった。

「あれあれー？　もしかして初めての人かな。コンニチワー！」

爽やかなワサビ色の髪をした女性が、市門から無警戒にウィルヘルムへと近づいてきた。他の冒険者や市民たちとは明らかに一線を画する、不自然に露出度が高い、奇抜な服を着ていた。ウィルヘルムは決して油断しなかった。恐るべき魔女の類いかもしれぬからだ。

（まずいぞ、異種族か……！）

鷹のように鋭い魔女狩師の目は、彼女の頭の上にカチューシャめいて生えた兎の耳を見逃さなかった。人間の耳と合わせれば、彼女は四つの耳を持っているのだ。異形の怪物か。ワーアニマルの類いか。

「プライムガルドに来るのは初めてですかァ!?」彼女はたおやかなバストの谷間を強調しながら、嬉しそうな表情を作って近づいてくる。

ウィルヘルムは反射的に、腰に吊ったマンゴーシュを抜き放ち、彼女の腹部を貫こうとした。見知らぬ異種族に心を許すな。それがデッドランドの掟だからだ。

だが、ウィルヘルムは思いとどまった。

それは賢い判断であった。城壁の上の衛兵たちが、彼の方を一瞥したからだ。

この世界の流儀が解るまで、おかしな行動は慎まねばならない。さもなくば、死あるのみ。

「……プライムガルド？」ウィルヘルムは訝しむような視線のまま、顎から唇の下まで続く深い傷に触れ、無精髭を撫でた。「この街の名か？」

「そうです！　正確には、ロード・オブ・イグゼシオのイグゼシオ大陸中心部にある首都、魔導都市プライムガルドですよ！　私の名前はマリカです。初めてこの街に来た人をサポートするのが私の仕事なんです！」

「……そうか、俺は魔女狩師だ。俺の親父も、その親父もまた、偉大な魔女狩師だった。俺は無数の異種族を狩り殺し、奴らに加担する堕落した人間どもを火炙りにしてきた。人間の尊厳を守るために、正しきことをなすために」ウィルヘルムは、彼がいつも竜の辻でしているように、誇らしげに口上を述べた。

「魔女狩師って何ですか？　聞きなれないクラスですね。そのコートとか装備も初めて見ます。そんなクラス、あったかなあ……？」マリカはきょとんとして、首をひねった。

「魔女狩師を知らないだと……？」ウィルヘルムは己の名誉を傷つけられたと感じ、いささか刺々しく返した。「マリカとやら、魔女の類いではなさそうだが……お前も奇妙な服だ。街道で出会えば、即座に殺されても文句が言えぬほどのな。それは王族から与えられた服か何か？」

「あ、これですね？　確かに冒険者は着れませんし、この街にも不似合いですよね。これ、セーラー服の一種です！　春のキャンペーンが終わったはずなのに、好評だったせいで、ずっとこのままなんです！」マリカは屈託のない笑顔とともに返した。ほとんどウィルヘルムには理解不能だったが、あるひとつの単語が彼の心をとらえた。
「キャンペーン？　この世界にも、戦役（キャンペーン）があるのか？」
「ハイ、そうです！」
「なるほどな……」ウィルヘルムは複雑な表情で頷（うなず）いた。ようやく互いの共通点を見出すことができた気がしたからだ。
「俺の世界でもそうだった。地獄の軍勢との間で続く、永遠の戦役だ。人間族の世界は滅びの危機に瀕（ひん）している。お前たちの戦役も、かんばしくないのか？」
「えっと、そうですね。キャンペーンは……。ウィルヘルムさんも、プレイヤーじゃないみたいですし、ここだけの話ですけど……実は、キャンペーンがあまりうまくいかなくって、経済的に大変みたいです。プレイヤーも減る一方らしいですし……」マリカは少し暗い表情を作った。
「プレイヤー？　ああ……冒険者の事か。俺たちとは違う、世界を渡るほどの特別な魂を持った連中のことだな」
「そうです！」
「ともかく、戦役が終わって冒険者が減った。それで、街の案内人までもが、娼婦（しょうふ）まがいの仕

事をしなくてはいけなくなったか……世知辛い話だ」
ウィルヘルムは世の常を儚み、かぶりを振った。
「娼婦？」
「いや、すまん、何でもない。悪かったな、立ち入ったことを聞いてしまって。人が死んで減れば、国の財政もおのずと傾く。街の再興のためならば、手段は選べまい」
「そういうことです！　この街をたくさんの人に好きになってもらって、昔みたいに冒険者の人数を増やすのが、私の仕事なんです。私、この街のために毎日頑張ってるんですよ！」
マリカは誇らしげに胸を張った。
その献身的でひたむきな姿勢は、ウィルヘルムの胸を強く打った。
「……お前は気丈だな、マリカ。俺はお前のことを誤解していたようだ。ガッツがある。お前は正しいことをしている。それにひきかえ俺ときたら、他種族を見るとすぐ装備や言葉や信仰でそいつの価値と脅威度を判断しちまう……俺の悪い癖だ」ウィルヘルムは肩をすくめて、自嘲的な苦笑いのemoteを行った。
「エッ、それほどでも。そ、そんなに褒められると、何だか、照れちゃいますね……」マリカは上目遣いで頬を赤らめ、両手の人差し指を合わせてモジモジするemoteを返した。
それはウィルヘルムが生まれて初めて見る奇妙なemoteだったが、少なくとも自分に対して敵意を持っていないことは解った。まだこの世界の事情は解らぬが、少なくともこのマリカという女は信頼してよさそうだ。安全な酒場に案内してもらうとしよう。ウィルヘルムはそう

考え、食べ終えたリンゴの芯を彼女に見せた。額から垂れる酷い汗を拭いながら。
「実は、腹が減っていてな、酒場の類いは……」
直後、彼は卒倒した。未だワイヴァーンの毒が残っていたのだ。本来彼は、道中で行倒れとなっていてもおかしくないほどの高熱であった。ようやく街に到達し、敵ではない者に出会ったことで、限界まで張り詰めていた精神が、一気に緩んだのだ。
「ウィルヘルム＝サン⁉　ウィルヘルム＝サン⁉」
マリカは絶叫し、衛兵を呼んでウィルヘルムを診療所へと運んだ。

2

二日後。毒から回復し、どうにか歩きまわれるようになったウィルヘルムは、見舞いに訪れたマリカとともに街を散策することにした。
「つきあわせてすまんな、マリカ。俺は余所者だ。お前からここでの流儀を学ばねば、ついうっかりと、無作法なことをしでかすのではないかと心配だった。それにお前が一緒にいれば、住人たちも驚かずにすむだろう」
「全然気にしないでください！　今日は平日ですし、新しいプレイヤー……ええと、冒険者も来ないでしょうから。それより、街の人たちにウィルヘルム＝サンを紹介できることの方が嬉しいです！　冒険者じゃなくて新しい住人が増えるのは、本当に久しぶりですからね！」
「そうか、お前は本当に前向きだな。出会うたびに驚かされる」いまやウィルヘルムはマリカ

に対して、ある種の敬意を抱くようになっていた。
「私、本当に嬉しいんですよ！」マリカはemoteを繰り返しながら先導した。
「いささか喧(やかま)しいほどに前向きだ」
「何か言いました？」
「いいや」
「ゲオルグさんなんかは、退屈しすぎて、瞑想ばかりするようになってしまいましたから、話し相手ができればきっと喜びますよ！」
二人は酒場を手始めに、衛兵たちの詰所や、街の要所要所を巡った。
驚いたことに、献身的で善良なのはマリカだけではなかった。看護にあたってくれた医者も、衛兵たちも、宿屋の主人も、酒場の主人も、異教の神官たちですら、容姿端麗で善良な者たちばかりだった。とりわけ、市内の丘の広場にいる古老傭兵隊長ゲオルグは、禅の教師のように達観した偉大な人物であった。
そして彼らは皆、他の世界から飛ばされた挙句(あげく)に愛馬を失ったウィルヘルムの不運に対して心から同情し、治安を乱して冒険者たちに迷惑をかけるようなことをしないならば、いつまでもプライムガルドで暮らして良いのだぞと言ってくれた。
「なんと素晴らしい世界なんだ」ウィルヘルムは感銘を受け、マリカはその言葉を聞いて心から嬉しそうに微笑(ほほえ)んだ。
「助けてもらった礼をせねばならん。俺もこの素晴らしい世界の役に立ちたい。マリカ、俺を

戦争の最前線か、小競り合いが頻発している辺境の開拓地まで案内してくれないか。むろん、道を教えてくれるだけでいい」
「最前線？　戦争の……？」
「ああ、危険は百も承知だ」
「ええと、プライムガルドの市門を一歩出ると、いつモンスターに襲われてもおかしくはないですけど、戦争は……」
「いいかマリカ、俺は魔女狩師なんだ。怪物を退治して街を守ったり、道を教えてやるのは、俺の得意分野じゃない。それは衛兵やお前の仕事だ。高い知性の異種族、あるいは堕落したエルフや堕落した人間どもが、俺のもっとも得意とする獲物なんだ。国境線を侵犯してきた敵国の冒険者どもを容赦なく追跡して殺すのが、俺の役目なんだよ。俺の鋭い目は、卑劣なスキルを使って忍び寄ってくるシーフやアサシンどもでさえ、瞬時に見つけ出すことができる。俺のマンゴーシュは、そいつらの不潔な心臓を何千何万と貫いてきた。俺のボウガンは、泡を食って逃げ惑う汚れた卑怯者どもの心臓を、背中から何千何万と……」
「ウィルヘルム＝サンは、恐ろしい世界からやってきたんですね……。でも、安心してください。大丈夫です、この世界にプレイヤー間の戦争はないんです。それどころか、盗みや殺人も起こらないんですよ」
「起こらない⁉　何故(なぜ)だ？」ウィルヘルムはその衝撃的な言葉に眩暈(めまい)を覚えた。
「ええと……難しいですね。最初からそうだったんです。神々がそう定めたんですよ」

「待て、理解が追いつかない。……そうだ、近くに狩場はあるか？　この世界にも、狩場はあるだろう？　大勢の冒険者たちが、怪物どもを求めて集まる場所だ」
「狩場……ありますよ！　一番近いのはカボチャ農園ですね。そこならあまり離れていないので、私でも案内できます。行きましょう！　そこを見れば、ロード・オブ・イグゼシオがどれだけ平和で安全な世界か、ウィルヘルム＝サンにもきっと解ってもらえると思います！」
マリカは意気揚々とウィルヘルムを先導した。
ウィルヘルムはようやく、自分の世界との接点を再度見つけ出すことができると考え、胸をなでおろしていた。いかに平和な国といえど、あらゆる欲望が渦巻く狩場では、人間の醜い本性が剝き出しになる。いかにプライムガルドが善良な市民と冒険者たちばかりといえど、狩場に赴けば、自ずと堕落した者たちや邪悪な者たちが見つかるはずである。ウィルヘルムはそう考えたのだ。だが。
「何だこれは……！」
農場に広がる光景を見て、ウィルヘルムは愕然とした。

ウィルヘルムが目にした驚異の事態とは……?!
続きは物理書籍版で今すぐチェック!!

目次

編者序文 ―― 006

ノッペラボウ銃殺！ ハーンが殺す！ 殺す！ 撃ち殺す！

ハーン：ザ・ラストハンター トレヴォー・S・マイルズ ―― 009

ハーン：ザ・デストロイヤー トレヴォー・S・マイルズ ―― 043

訳者解説 ―― 089

ハイスクール・センパイ・巨大ロボット・吸血鬼・アクション・ロマンス！

エミリー・ウィズ・アイアンドレス ～センパイポカリプス・ナウ！～ エミリー・R・スミス ―― 095

訳者解説 ―― 112

豆腐スペースコロニーの寂寥（せきりょう）と狂気を描くSFサスペンス

阿弥陀6 スティーヴン・ヘインズワース ―― 119

訳者解説 ―― 143

ネッケツ・ハイパー・スポーツ・アクション
流鏑馬な！　海原ダンク！　アジッコ・デイヴィス　145
訳者解説　182
ショック!! 日本の奥地に食人族!! 戦慄のソリッド・ゴア・ホラー
ジゴク・プリフェクチュア　ブルース・J・ウォレス　185
訳者解説　233
ジャパニーズ・ペーソスを折詰にした
隅田川オレンジライト　デイヴィッド・グリーン　235
隅田川ゲイシャナイト　デイヴィッド・グリーン　249
訳者解説　257
奇跡と感動のカルチャーギャップMMO！
ようこそ、ウィルヘルム！　マイケル・スヴェンソン　259
訳者解説　311
訳者あとがき　314

『ハーン・ザ・ラストハンター』
筑摩書房特設サイト
ブラッドレー・ボンドの刊行記念
インタビュー、更なる試し読み
コンテンツなど続々更新中!
ハーン・ザ・ラストハンター 筑摩書房
検索
最新情報はこちらでチェック
@CHIKUMADHT
イラスト／久正人